

文芸サロン 作品集

『文芸サロン』

NPO法人 シニアネット福岡文芸愛好会

令和三年七月作品

川柳(二)

榊 拡司

また宣言、夜遊び官僚、またバレた

よくやった、日米協議より、ワクチン交渉

居酒屋で、酒断られ、路上飲み

パワハラで、選んで楽し、テレワーク

スーパーで、本を片手に、居場所探し

いざ行かん、石鹸片手に、デイサービス

マン防と、叫んで出された、緊急事態

連休頼み、観光客来ず、また借金

行くアテなし、買い物ぶらぶら、またコロナ

アホ議員、実のない空論、気になる選挙

(2021年5月)

川柳(二)

榊 拡司

明日がある、待ちわびて、飲むビール

なんとまあ、見覚えそぞろ、なつかしや

若返り、無意味な話で、盛り上がり

思い出は、いいも悪いも、笑い飛ばし

理想高くと、燃え尽きた、好々爺

残念なり、意気揚々たるも、金はなし

物分かり、食欲も物欲も、今はなし

今もある、物言えず消え果てし、淡い恋

忘れ日の、老いても残る、あのケンカ

気が付けば、すべてに時効、笑うしかなし

再会を期し、三途の橋で、待ち合わせ

(2021年6月)

五十年ぶりかに会った旧友との会合の様様を詠った11句

宝くじ

山本 為三

昭和30年代中頃かな。20代中ごろのこと。町のタバコ屋で宝くじを買った。

10枚買ったのか1枚だったか、そもそも、なんで宝くじを買ったのか、覚えていない。買ってからそんなに日がたつてないとき、上司と出張に行き、旅館で朝飯を食べた。朝刊を読んだ。一通り読んで目が宝くじの当選番号の記事に行き、自分がかじを買っていることにふと気づき、上司の前で見せた。そして番号をチェックした。

6桁の一等当選番号を指でなぞった。うっ、うっ……あれえ、6桁が一致しているじゃないか。ミスプリント印刷の間違いやないだろうな、新聞を疑った。旅館にある別の新聞と照合したような気がする。間違いはない。

安心したその時、上司が言ったのか自分が気づいたのか、組番号は？

2桁か3桁の組番号も一致して初めて当選になる。

組番号を見た。違う、一致していない、一等当選じゃない、6桁の数字が一致のとき、顔が見る見るほてってきたが、組番号不一致がわかると、血の気がすうっと引いていき、ほてっていた体全体が元に戻った記憶がある。一等組違いは1万円。で

なければ100万円。当時月給が1万2千円台。100万円の夢は吹き飛んだが月給並みの大金が当たった。大喜び。

出張から帰って当選金1万円を受け取りに銀行に行った。勸業銀行の支店が町の中心部にあった。

当時、普通のサラリーマンなどは銀行とは縁がなかった。月給はすべて現金の手渡し。銀行の扉に触れることはなかった。恐る恐る銀行に行った。扉がやけに重く力がないと開かないくらい。中に入った。客の姿はなかったような気がする。客と行員の間は仕切られているがその仕切りは大理石のごつついつきり。しかも客からは、仕切りの向こうが見えないくらい仕切りが高い。行員は斜め上から商談の客を眺め、客は顎を挙げながら行員と会話をする。

そんな銀行に、ひょっこり若いサラリーマン風の男性が来た。中年の女性行員が応対した。何か御用ですか。宝くじに当たりました。1万円を受け取りに来ました。小柄な私は思いつきりあごを挙げて女性と問答、こちらは場違いな場所に来てしまい緊張気味なのに対して、女性は至って冷静に対応。冷静というより冷たい対応かな。

女性は1，2回奥へ引つ込んだ後、あなたのような若い人は預金をしなさいと言い出した。今日はお金を渡さないというのである。いやそんな……などと問答も気恥ずかしくなって通帳を作ってもらい退散。

この1万円は転勤の時に再び銀行を訪問、転勤ですので、と言って引き出した。なにも言われず簡単に引き出せた。

ひとり芝居風の騒ぎであるがそこでは特筆すべきことが三つある。

ひとつは一緒に出張に行った上司のことである。その口の堅さに今も敬服している。この上司、山本が宝くじに当たり損ねたことを口外しなかった。新聞で番号が一致してから当選金が100万円から1万円下落したその急変、目撃談としては面白い。たいていの人はしやべると思う。

二つ目は銀行のことだ。当時の銀行は近よりがたい威厳に満ちていた。サラリーマンが出入りするところではない。大理石のカウンター越しに顎を挙げて背伸びをしながら行員の女性と問答をする、客はだれもない、緊張をする。預金する、しなはいは関係なく一秒でも早くこの場を立ち去りたい心境だ。現代の銀行のサービスぶりと比較する。隔世の感。

三つ目。その瞬間、体が火照ったこと。その瞬間とは一等100万円の6つの数字が一致した瞬間である。顔が赤く変色し

ていくのがわかった。多分そばにいる上司の顔を見て何か言葉を発したと思うが記憶にない。覚えてるのはからだ全体が、やたら火照り、汗が出ていたこと。

月給の10倍でこんな状態である。今の宝くじは当選金は億単位である。もし当たればどんな反応になるのかなあ。根っこが欲深で小心者たぶん手が震え白目をむいて卒倒、救急車の中で「当たった、当たった」とうわごとを言いながら一巻の終わりになる？

この土壇場、ちよつと恥ずかしい。



短歌

宮 由枝

水張田に啼ける蛙の声そろふ

乾く道行く集落ありて

大楠は老いて副木に支えらる

日のなき洞うらにぬるき風過ぐ

栗饅頭三つ買ひたる和菓子屋の

のれんにうさぎ跳ぬるをくぐる

(2021年7月)

川柳

小河 常弘

コロナ禍の 痛み背負って 五つの輪

ブカン株 イギリス、インド バツハ株

高齢者 二回接種の うで自慢

(2021年7月)



山桃は田植え時

三島 武

金曜日の午後、習い事をしている。天神に出るなら、午前中に映画にでも行こうと、KBCシネマに向いた。十時からの上映というのに、開館は九時四十五分からです、しばらくお待ち下さい、と立て札があつて扉は閉まっている。天気も良いことだし、開館まで二十分近くの待ち時間を、須崎公園で過ごしてみるかと歩いてみた。

大きな噴水池や野外音楽堂の回りなど、散歩中の人と同じ歩調で、回つてみた。木立の繁みは五、六十年以上の歴史を感じさせる。

初夏の朝日を木陰のベンチにかけて避け、さわやかなそよ風を頬に受けながら、しばし想いにふけた。

昔は、福岡市内でのコンサートや演劇などの公演は、横の市民会館が多かった。公園内には福岡県立美術館もある。文化会館や美術館には時々来ていたし、野外音楽堂にも偶には訪れたことはあつた。だが最近はまだ近寄ることはない。

街を走る車の音に混じつて、小鳥のさえずりも聞こえてくる。雀が木漏れ日のなかで飛び跳ねしている。ふと、戯れる雀の先を見ると、赤紫色の山桃の実が、今朝落ちたばかりであろう、鮮やかな色で転がっている。上を見上げると、たわわに実をつけた山桃の木が、大きな枝を広げていた。

もったいないなあー。誰も採って食べないのだろうか？

小中学生のころは、山桃の季節になれば、早速木にのぼつては食べ、口の周りは勿論、着ている服など親に怒られるほど、赤く染めた。田舎の子供にとつて、貴重で夢中になる食べ物であつた。

山桃の季節は、田植えの最中である。

山つきの方から平野部分へと順に水がかかり、農家は田植え作業で猫の手も借りたいほどに、忙しくなる。今と違って、人の手で苗を植えていくのである。平野部の父の実家などは、山つきの既に終わった農家の人たちに加勢を頼み、人手を揃えて田植えをしていた。手間返しと云う慣習もあつた。

小中学生の頃は、綱張りや苗配りなどの作業を手伝つた。きれいに塗られた畔を壊さないように歩きながら、向こうの畔まで張つた綱を平行に移動させるのである。向こう側の引手との息が合わないと、綱が緩み植え手に綱が引つ掛かる。また、引きあう力が急に変わったりすると、畔を踏みはずして田圃の中に落ち込み、泥んこになつたりする。

植え手は張られた綱と綱の間に入り、一束の苗を持って、あと膝りしながら植えていく。持つている束の苗が無くなる頃、傍に次の苗が配られていることが肝心である。

子供心に計算をして感覚を見定めては事前に配つて投げ歩く。植え手から苗の催促がないように細心の気配りが求められる。昼ごはんや三時のお茶の時に小言を貰われないように頑張つたものだ。

車の免許を取ってからは、さらに加勢人の送り迎えの仕事が加わった。

家族、親族総出での一大作業は、小さい子供でも、それなりに仕事があつて、存在価値を認めてもらえる行事でもあつた。

梅雨時になると機械化される前の田植え時期が、懐かしい。

そして、あの甘酸っぱい山桃の味が甦ってくる。

どれほどの時間を費やしたのであるか？ 十時前五分である。慌ててKBCシネマに戻って、目当ての映画「オレンジと太陽」を見ることにした。



SNF 『文芸サロン』 へのお誘い

※俳句・短歌・川柳・随筆

※旅の紀行文

※読書・映画などの感想文

※趣味や生活の記録文 などなど

興味のある方 ご連絡ください

連絡先 SNF 愛好会「文芸サロン」世話人まで

zimkyok@seniornet.or.jp

092-732-3115